

国際鉄道安全会議2018

安全で風通しの良い職場風土を創り出すため 原因究明委員会の議論を強化しよう!!

10月21日～25日、アイルランド・ダブリンで「国際鉄道安全会議2018」が開催されました。JR東労組から左沢線営業所分會・関沼分會長、本部・加藤書記長、JR総連から柳書記長、武川書記が参加しました。

JR東労組として「駅構内入換時に誤出発停止装置が動作した事象」に対して、「正しい報告と処分・指導のあり方、何でも言い合える風土を創り出すためにどうすべきか」について、左沢線営業所分會・関沼分會長が提言を発表しました。

冒頭、10月12日のテレビ朝日「報道STATION」で放送された、JR西日本の「新幹線時速300キロ体験研修」を観てもらいました。その上で、JR東日本において過去には現車を使ったドア扱いや、組員をドア位置に立たせ、管理者によって「お客様がドアに挟まれたらどれだけ痛いか手を挟んでみる」「どうだ、痛いか。次は肩だ」「次は足だ」といった体罰教育が行われ、中止を求めてきたことを報告し、会場から失笑とどよめきが沸き上がりました。

ヒューマンファクターの視点に基づき「意図しないルール違反」「意図したルール違反」を分析した中で、①「ルール・規則のあるべき姿」を現場レベルから再度考え、明示すること、②「意図を統一すること」③「報告する文化を醸成させること」④「報告する文化を醸成させること」⑤「職場の風土を管理者レベルから構築させること」⑥「処分・罰則」よりも「指導・教育」を重視させることについて、当事者からの自己



申告に基づき、具体的に職場での議論を深めていかなければならないことを提言しました。

そして、当事者と共に同種事故を二度と繰り返さないために、「事故から共に学ぶ謙虚な姿勢」と「事故原因の徹底した究明の議論」を怠ってはならないことや、厳罰主義に切り縮め、隠蔽する風土を許さない立場を鮮明にし、堂々と訴えました。

海外の参加者から「あなたたちの提言は、実用性があるので、資料がほしい」「とても素晴らしい提言だった」と反響があり、各国の鉄道の共通認識として「安全なくして労働なし」と高めていくべきであると感じました。

今後も職場現実を的確に把握し、会社との議論を積み重ね、安全で働きがいのある職場を創り出します。

仲間の実践が安全運行に貢献!!

防災・減災プロジェクトにおける議論

バス、鉄道の「防災・減災プロジェクト」をそれぞれ10月17日、10月24日に開催し、どのように自然の猛威に向き合っていくかを議論しました。

特に、9月に発生した台風21号・24号に伴う職場問題を出し合い、どのように安全を創り出してきたのか、その根拠は何かを明確にしました。

「高速道路の速度規制」「運休の連絡の徹底」「避難誘導案内の課題」「安全を確認した上での運転再開」「情報周知の仕方」「倒木対応」など、職場には多くの課題があり、安全を第一に考えることが重要であると確認しました。

速度規制は、危険であることが予測されるからこそ規制がかけられているのであり、お客さまにも「命・安全を守るための規制」であることを理解してもらうことが重要です。「命の危険に晒されても良いから、絶対に遅れるな」という方はいないと思います。いたずらに遅らせるわけではないこと、安全確立を徹底することの重要性について改めて確認しました。安全なバス・鉄道だからこそ「また利用したい」というのが、お客さまの心理であることも職場の声として出されました。

何のための速度規制か

職場から議論を積み上げた結果、安全運行に貢献していることも明らかになりました。

昨年、八戸運輸区分会で倒木に衝突する事象が発生し、原因究明委員会を通じて、いかにして安全を確保すべきかと議論しました。そして、倒木が予想される場合、速度規制が実施されていなくても、手前に停車できる速度で運転することを築き上げてきました。しかし、それは決して簡単なことではなく、内にある運行優先体質と自分自身が向き合わなければならず、今も議論を積み重ねています。

安全は、常に存在する危険の芽を摘んでいくこと

自然の猛威と向き合い、 全組員で安全を築き上げよう

です。単にマニュアル・ルール通りに仕事をすることはなく、その形成過程や、なぜ必要なのかを理解し身につけることが大事です。しかし、マニュアルを超えて判断することで命を守り抜いた東日本大震災の教訓を忘れてはなりません。マニュアルを否定することではなく、命を守り抜くために何が必要なのかと瞬時に反応し、判断することが求められます。だからこそ私たちは、常に「感性・感覚・判断力」を養っていくこと、職場の仲間が感じた「これで良いのか」という疑問をもとに、さらに安全議論を深めていくことが必要なのです。

本部は、11月1日に申10号「発生している輸送混乱の課題を明確にし、防災・減災の取り組みの強化と異常時対応力の向上を求める申し入れ」を行い今後議論します。

防災士と共に、どのようにすれば安全が築けるかの議論を積み重ね、異常気象時代の中でも揺るがない安全なバス・鉄道を創り出していきましょう。

